

岡林伸夫著『ある明治社会主義者の肖像「山根吾一覚書」』

(不二出版、二〇〇〇年三月発行)

出原 政雄

本書は、明治社会主義者たちの肖像画の一つとして、これまで無名に近かった山根吾一（一八六七—一九三四）という人物を新しく世に送り出した評伝作品である。先行研究もほとんどなく、関連資料も埋もれたままの状態の中で、苦労して探り出した数々の断片的な史料をジグソーパズルのようにつなぎあわせて描き上げた文字通りの労作と言っても過言ではない。明治社会主義を中心的に担った著名な片山潜や幸徳秋水などとの交流をもちながらも、これまで見過されてきた山根吾一という人物にあえて着目し、その生涯と活動を明らかにした本書の特徴は、日本社会主義史研究において一方の柱を形造っている「バイ・プレーヤーの復権」（成田龍一）という研究スタイル、つまり脱中心的な人物研究の流れに位置し、そこに一つの成果をつけ加えたとみなし得る。また逆にいえば、そこから期待されることは、バイ・プレーヤーの一人である山根吾一の研究を通して、片山や幸徳のようないわゆる「中心人物」の人物像や明治社会主義の思想潮流を改めて問い直すことが可能になるかもしれないということである。しかも明治社会主義とは片山らの「中心人物」を核として、その周囲に多くの人物が集まった星雲状態を意味し、「この（星雲）状態のうちには多様な発展の可能性が孕まれていた」（『日本社会主義の思想』）とみなす松沢弘陽氏の問題提起に照らしてみれば、山根吾一の生涯と活動を詳細に明らかにした本書は、明治社会主義のいかなる発展の可能性を表現しているのであろうか。およそこうした問題意識をもちつつ、以下では山根吾一の生涯の中でも、興味を抱いた若干の局面に限定してコメントすることにした

い。

まず最初に、山根吾一の「アメリカ行」が注目される。明治社会主義にいたる道程には、いうまでもなく二つのルートがあり、一つは自由民権運動からの継承・発展の流れであり、もう一つはアメリカ体験の中で社会主義に接近するタイプであるが、山根は後者に属する。さらに、アメリカ体験に関しても、松沢弘陽氏によれば、高野房太郎や片山潜のように働きながら生活を支え苦学した「渡米」派と、安部磯雄らのように生活費を受けて大学などに留学した「洋行」派とに分類されるが、山根は明らかに前者のケースに入る。しかも山根の「アメリカ行」が一八九〇年であったという事実が本書で初めて突き止められたが、片山が一八八四年に、高野が一八八六年に相ついで渡米していることと対比すれば、山根もまたほぼ同時代のアメリカでの革新的な社会状況に接していたと推測される。アメリカ体験の中で高野は労働運動に目覚め、片山はラッサールに憧れ、安部はキリスト教社会主義者に転身したのに対して、山根の場合はどうだったか、この点をまず知りたいところだが、アメリカでの山根の行動や思想遍歴の内実が史料不足で今のところ詳しくわからないのは誠に残念である。

山根は帰国後、片山潜主催の渡米協会第一回総会（一九〇二年）に突然顔を出した頃から、社会主義運動に参加し始めた。主として、山根は片山編集の『労働世界』や渡米協会を手伝い、そして片山が再び渡米した留守中には、その他に片山が深く関与していた鉄工組合やキングスレー館の運営までも肩代わりすることになる。その意味でも、一時期幸徳らによって創設された「平民社」の営業畑で側面援助をしたことがあったとしても、基本的には片山潜の最も近くにいた仲間の一人であったといえる。しかし、そこから窺える山根のイメージは、熱心な社会主義者というよりも、雑誌の編集者やインタビュアー、あるいは営業マンという印象の方が強い。山根は、一方で普通選挙運動や電車賃値上げ反対運動に参加する活動家として登場したり、他方でたまに講演会の弁士を引き受けることはあっても、決して片山や幸徳

のような理論家とは言えない。本書で詳細に明らかにされた山根の行動の軌跡をたどっていくにつれ、山根を明治社会主義者に分類するのが妥当かどうかという素朴な、しかし根本的な疑問がどうしても消えない。確かに明治社会主義を「中心人物」とその周辺の人々による星雲状態において捉える視角からすれば、片山ら「中心人物」と対比して山根はいかなるタイプの社会主義者で、社会主義についてどの程度の知識をもっていたのかという風に問うこと自体無意味なのかもしれない。しかし、山根はなぜ社会主義者と行動を共にしようとしたのか、またそもそもどうして社会主義運動に首を突っ込むことになったのか、少なくともこうした疑問には答える必要があるだろう。この点に関して、著者は意識的に明示してはいないが、山根の生涯において、たとえばアメリカ行きの船中で人身売買にひっかかったらしい少女を救えなかった苦い思い出にうかがわれるヒューマンな感情、おそらく幼き頃から貧困に苦しみ、様々な職業を転々とした経験の中で培われた労働観、詳細は不明だがキリスト教への入信とのかかわりなど、注意深く読めば山根が社会主義に傾斜する心理的要因は所々にちりばめられていると言えなくもない。

山根は、渡米中の片山の代役を勤めているとき、一九〇四年二月に勃発した日露戦争に遭遇したが、再刊・編集し始めた『社会主義』の誌上において、基本的には非戦活動の一端を担うことになった。ただし幸徳らが『平民新聞』を舞台にして日露非戦論を華々しく展開したのに比べれば、山根の取り組みは大上段にふりかざしたのではなく、『社会主義』に「戦争の影況」欄を設けて、戦争が国民に与える悪影響の事例を紹介したり、木下尚江の「戦争の影」などの若干の非戦論説を掲載している程度にすぎない。その中で一つ教えられたことは、『大菩薩峠』の作者である中里介山が寄稿した論説「戦争と宗教家」の中で、幸徳らの主張に影響を受けたのか、帝国主義論を下敷きにしたかなり急進的な非戦論を披瀝していた事実を新しく発見できたことである。それはともかく、「兵士と細君」など山根の数少ない論説からうかがわれる非戦論の内実は、戦争がいかに国民に弊害をもたらすかという視点からの戦争批判が中心で、いわゆる世

俗的な戦争嫌悪感の域を超えてはいない。

その後の山根の生涯において留意すべきは、日露戦争の直後に大きな変化が現われたことである。第一に、山根は突然に山路愛山や斯波貞吉を中心にして創設された「国家社会党」の幹事として登場するが、この行動は片山派のグループから国家社会主義への宗旨替えのように受け取れる。筆者によれば、その直接のきっかけは、おそらく斯波貞吉の勧誘によると推定されているが、それ以上にここで注目したいことは、心情的には日本の勝利を望みながら非戦論を唱えるという斯波の精神態度を山根も共有していたのではないかと問題提起されている点である。というのも、戦争を嫌悪しながら同時に日本の勝利を望むという矛盾した感情にどのように折り合いをつければよいかという問題は、日露戦争に遭遇した当時の知識人たちが、非戦活動に乗り出そうとしたとき、多かれ少なかれ思い悩むにいたった心理的葛藤の一つであったからである。渡米中の片山が日露戦争の最中になかなか日本に帰国しようとしなかった背景にも、こうした葛藤や揺れが心底に宿っていたからであり、内村鑑三もまた絶対戦争否認を標榜しながらも、旅順の陥落に万歳を叫ぶ人物であった。評者の勝手な推測をまじえれば、山根の場合も、彼の中に沈殿していたナショナルリズムの心情と非戦論の主張との間にきしみが生じ、それが山根を国家社会党に走らせる隠された要因であったように思われる。いずれにしても、戦争嫌悪とナショナルリズムとの関連というテーマは、日露非戦活動の特質を分析する際の興味深い問題の一つであり、山根の行動の軌跡はこの問題を掘り下げるための新たな実例を示しているといえるのではないだろうか。

山根における日露戦後の第二の変化は、『社会主義』の題名を『渡米雑誌』に変更したことに暗示されているように、社会主義運動そのものから離脱したのではないかと想像される点にかかわる。少なくとも内務省警保局はそのように観察していた。この頃の山根は、帰国してきた片山との間に確執が生じ、彼と袂を分かち独自に渡米奨励活動に専念するようになった。山根の渡米奨励論の内実を、片山と対比しながら吟味しているところは、本書においてとりわけ興味深

いものがある。山根の渡米奨励論をまとめてみると、第一に渡米によって社会問題に開眼し社会主義者が育つことを期待する階級的観点、第二に当時の青年に強かった「立身出世」や「成功」への願望を単純に渡米に向けた社会的上昇志向への訴え、第三に外国での成功を「民族の活路」ないし「国民的発展」として称揚するナショナルリズムの観点、第四に密航業者の悪事から渡米志願者を守ろうとした人道的な観点など、これらの諸要素が渾然一体となっていたというところである。山根の場合、『社会主義』から『渡米雑誌』への題名変更は、初期のころに見られた第一の階級的観点が消え去り、それにつれてナショナルリズムの観点が強まり、同時に社会的上昇志向が「資本家予備軍養成のイデオロギー」に転化したと見なしうるかもしれない。これに対して、片山の渡米奨励論も、山根とほぼ同様の諸要素を併せ持っていた。たとえば、一方で外国での成功は日本人としての「忠君愛国」の誉れとみなされるが、他方で渡米移民の増大が結果的には国内での人口増加によって小作料の騰貴や労賃の下落に苦しんでいる貧しき人々を救うことができると信じられていた。しかし、片山の場合、資本家・地主の抑圧を受けている貧しき青年たちを救おうとする第一の階級的観点をあくまで堅持しようとした点で、やがて山根との決裂を迎える運命にあったといえよう。ここでもう一つ付け加えたいことは、上記のような片山や山根の渡米奨励論に対して、幸徳が根本的疑問を呈した批判的見解が紹介されている点である。幸徳によれば、貧しき青年たちに渡米を熱望させるにいたった日本社会の「不良なる組織」の改革こそ問題にされなければならぬのに、渡米奨励は彼らの目を外に向けることによって、社会変革に向けての批判力を弱める点で、社会主義運動を進めるにあたって弊害が多すぎるとみなされた。ここに、渡米奨励論をめぐる片山と山根および幸徳の見解の異同をやや詳しく取り上げたのも、渡米論というユニークな視点から明治社会主義に照明をあて、これまで知られていなかった特質を浮彫りにする分析になっていることに気付いたからにはほかならない。

渡米奨励に専念した山根の活動も、一九一〇年代におけるアメリカでの排日運動の台頭によって息の根を止められ、彼

は表舞台から退場するにいたった。この時期を扱った本書の叙述が、『渡米雑誌』をさらに改題した『亜米利加』や『日米通信』などの雑誌の解題にスペースがさかれ、山根の顔がみえてこない印象が残った。ここに多少の不満が残ったとはいえ、山根吾一という人物に関する現在われわれが手にし得る最大の情報量が本書に詰まっていることは今さら多言を要しないであろう。そして本書の「あとがき」で紹介された山根に関する余録として、彼の孫にあたる山根寿子と福井美恵がともに女優となり、山根の血筋を引く者が歌劇や映画の世界で活躍していたという後日譚は読んでいて楽しい。さらに、本書の刊行間際になって、山根吾一の写真が発見されたというのも、まさに著者の執念の賜物であると思えてならない。

最後に本書に関する全般的な印象を付け加えるとすれば、何よりも山根の評伝を叙述する心構えとして本書の書き出しで述べられた、歴史的な写真を説明するにあたって「一人おいて」と飛ばされてしまう人物の研究をしようという著者のまなざしは、丸山眞男が以前に日本史研究者としても有名な旧友のハーバート・ノーマンの追悼文の中で語った「無名のものへの愛着」という言葉を思い出す。そして、これまで埋れていた山根吾一という明治社会主義者の生涯（厳密に言えば前半生）と行動を綿密に調べ上げ、読み応えのある評伝に仕上げた著者の執念と力量には脱帽するほかない。ただし残念に思うのは、逆にいえば山根吾一の足跡を追求する事実探訪に徹するあまり、歴史離れになることを恐れてか、推測の領域に深入りすることに禁欲になりすぎているところがみうけられた点である。とくに山根の思想内容や心理的な動きについてもっと深く知りたいという思いが強くなるにつれて、史料不足に阻まれて止むを得ないとしても、著者自身がもう少し突っ込んだ推測を交えてくれているれば、山根の人物像をめぐって読み手があれこれと想像する楽しみが増えたのではないかと惜しまれる。ともかく山根吾一という人物を本書で世に送り出した以上、山根の明治社会主義史上での位置づけや、そこに含まれる未発の可能性の提示など、新たな展開を著者に望みたい。ましてや一九八〇年代末

から東欧の激動やソ連の解体によって、社会主義の壮大な実験は失敗したという清算主義的な論調が横行している中で、社会主義者について語る現代的意義についても、著者の見解を聞きたいところである。晩年の丸山眞男がある座談会でソ連の崩壊以後社会主義はどうなるのだろうかという質問に答えて、「この頃、いよいよ本当の社会主義を擁護する時代になったなあ、という気がしているんですよ」（夜店と本店と―丸山眞男に聞く―）『図書』一九九五年七月）と言っているときの「本当の社会主義」を説明するためにも。